

第 12 回福田徳三研究会
2012 年 10 月 12 日（金）

近代中国における高等商業教育の展開：上海における教会学校を事例として

林 幸司

林でございます。よろしく申し上げます。ご紹介いただきましたように、私はもともと銀行のことについて考えていたのですけれども、ここからちょっと派生しまして、高等商業教育という話を最近しております。本日の報告は、実は 2 年ぐらい前に西沢先生のゼミで報告させていただいたものとあまり代わり映えはないのですけれども、今私が考えていることをご紹介させていただければと思います。

まず簡単にこの研究の動機についてご紹介したいと思うのですが、私の研究テーマは、19 世紀末から 20 世紀中ごろ、あるいは現代に至る、中国における社会経済的変容を、銀行業、商業を事例として明らかにするというものでありまして、拙著『近代中国と銀行の誕生』では、内陸部の民間銀行の設立、変容、消滅の過程を検討したわけです。

その中でいろいろなテーマが考えられるのですけれども、1 つには 1920 年代から 30 年代に、中国では非常に大きな転換がありまして、1920 年代以降、いわゆる経済発展とともに、さまざまな法整備がなされていくわけです。その中で、銀行にもいろいろな経営形態の変化が表れてくる。その 1 つがいわゆる合股という、日本でいえば合資会社のような形から、有限責任株式へ移行していくということですね。2 つ目にはその貸し付けのやり方が、信用貸し付けを主体とするものから、担保を取る貸し付けへと変化していく。さらに産業金融、あるいは信託部門というものが拡大をしていくという、こういう大きな変化が起きていたのではないかと考えられるのです。

これと同時に、銀行が伝統的形態からいわゆる近代的形態へ移行する際に、人材の質的転換が起こっていく。つまり、たたき上げの徒弟を主体とする時代から、大学卒、学卒へと転換していく。こういう現象が生じるわけです。

私が研究しておりました銀行では、学卒の多くの出身大学が、上海のアメリカ系教会学校のセント・ジョンズ・ユニバーシティー・シャンハイ（SJUS）、中国語で上海聖約翰大学というものでありまして、ここはいったいどういうことをやっていたのかな、というのが研究の動機になっております。これを事例として、近代上海における高等商業教育の草創期の状況について、検討していきたいということでございます。

先行研究、いろいろあるのですけれども、とりあえず中国の高等商業教育についてはそれほど多くないということを目指しておきたいと思っております。

資料については、上海市档案馆というアーカイブにある資料、あるいはアメリカのテキサス州にある、アメリカ聖公会のアーカイブの資料などを使っております。また、雑誌資

料もいろいろあるということで、教会刊行物あるいは大学刊行物、こういったものを主体に考えております。

この大学の商業教育についてお話しする前に、いろいろ伏線といいますか、前提になる話を少しさせていただきたいと思います。

すでに皆さんご存じのこととは思いますが、高等教育機関におけるビジネススクール、ビジネス教育というものについて、まずおさらいをしておこうと思います。起源は1881年のアメリカ、ペンシルベニア大学のウォートンスクールだといわれているわけですがけれども、その後1898年にシカゴ大学、あるいはカリフォルニア大学、そしてアメリカ全土へ広がっていく。1925年にはアメリカで183カ所のビジネススクールがあって、5万人に上る学生が入学をしていきます。ですから、19世紀の後半に始まったものであると言っていいかと思います。

この背景には、世界的なビジネス教育勃興の潮流、あるいは経済発展による強力な要請というものが下地にあって、商業や金融、会計、企業管理などの専門知識を持つ、いわゆる雇われ経営者の必要性があった。さらには、商人や経営者の高等教育の制度化、あるいは組織化、こういったものを目指すものであったということでもあります。

このアメリカ型のビジネス教育というのは、学士課程における2年間の教育を基礎としているということで、リベラルアーツと専門教育、合わせてやっていくというものです。一方、ヨーロッパのビジネススクールは3年間の学修を基礎としているということですから、形としてちょっと違うということで、これは日本とのかかわりを考える上でも重要かもしれませんこれがまず伏線の1でございます。

次に、今度は清末以降の中国において、この商業教育がどういうふうに展開していたのかという話です。これはいろいろと錯綜しているんですけども、まず1905年に科挙が廃止をされまして、それ以降、この近代的な教育行政制度というものが確立されるというか、それを模索していくわけですけども、その中で日本の制度が模倣されていくと。伝統的なリーダーである官僚、郷紳層がその担い手になっていくわけです。

高等商業教育という点でいえば、1897年、上海に南洋公学という学校が設置をされます。この南洋公学というのは、実業官僚の巨頭である盛宣懷という大人物がおりまして、この人がリードしているものであるというわけです。

南洋公学の設置というのは、いわゆる洋務運動という、西洋の技術を取り入れていく運動が当時行われるわけですけども、これを背景として幅広い実務家を養成していくという、これが目的になっています。工芸、機械、鉱山、そういった関係の技術者を養成していくと同時に、政治や文学、法律、道徳などの政治家を養成するというものでもあって、実業教育だけではなくて、伝統的な政治教育を兼ね備えた教育機関であったわけです。

これは商業や実業が軽んじられてきた中国にあって、画期的なものであったといえますけれども、その後の政治的混乱によって、大きな発展を遂げることはありませんでした。

これは清末期の状況ですけども、その後、今度は中華民国以降どうなったのかという

話です。1912年の中華民国成立以降、学制は清末期を踏襲しているわけですが、その中で商業専門学校あるいは商業系の学校というものが制度化をされていきます。商業専門学校については予科1年、本科3年という課程。それより上とといいますか、大学の商科では予科3年、本科3年という、大学の一学部としての位置付けがなされていく。

これが1922年以降、アメリカ式に転換していくわけです。商業専門学校は本科3年、そして大学は本科4年になって、商科単科大学の設置も可能になっていく。また両者に商業専修科が設置されていくということで、ですから20年代とそれ以前では違うようだということが、まず分かるかと思います。

これが中国全体の状況なんですけれども、伏線3なのですが、上海では都市発展とともに租界が形成をされるということは、もうご存じかと思います。上海における租界というのは、アヘン戦争の講和条約の南京条約、あるいは虎門寨追加条約といったもので現実化していくわけですが、1845年以降、イギリス租界、アメリカ租界、フランス租界、そして英米租界が合併して共同租界というものがつくられていくわけです。その中では外国人によるいわゆる自治、事実上の治外法権が行われていきます。

今回見るSJUSという大学は、旧共同租界の西端の方のこの辺、ジェスフィールド・パークというところの近くにあります。

旧共同租界の一番中心のところはバンドといわれるところで、そこには銀行や企業が立ち並んでいます。例えば、香港上海銀行があったり、日清汽船があったり、チャータード・マーカンタイル・バンクがあったり、少し裏に入りますと、私が追ってきました四川の聚興誠銀行が持っていたビルが現存しています。共同租界は要するに銀行、あるいは商業、外国経営の機関が立ち並ぶところでありまして、都市の発展と外国の勢力の進入ということが一体化しているという、そういう都市になるのです。

今見ました租界というところは、人口がまず大きく増加していたということですね。1865年には華界（中国人居留地区）が54万3,110人、共同租界が9万人、フランス租界が5万人だったところが、1920年代にはそれぞれ150万、84万、11万ということになっています。人口的にも広がる都市であるとともに、上海は対外貿易の中心として、全国対外貿易の4割から5割を占めていたといわれています。

というように、上海は租界を中心として、経済の中心地になっていきます。その中では欧米列強の中国進出が見られる。それとともに教会学校が設立をされていくという、こういう流れになっているということです。ここまでが前史といいますか、伏線のところがありますが、次に上海において、セント・ジョンズ・ユニバーシティーがどのように設立されたのかということをご紹介したいと思います。

まずアメリカ系の高等教育機関というものが、中国に数多く展開するわけですが、19世紀後半以降、プロテスタント系教会の活発な活動というものが見られるわけです。当初は伝道あるいは救済が中心だったわけですが、中国各地に、特に義和団事変以降大学が創設されていって、燕京大学とかいろいろあるわけですが、その中で最も早

くできた本格的な大学が SJUS だったわけです。

この SJUS というのは、大きく分けて 4 つの時期がある。まず 1 番目はカレッジ時代、大学でなかった時代ですが、1879 年に上海において、アメリカ聖公会の支援によってセント・ジョンズ・カレッジ（聖約翰書院）というものが開学をして、1886 年に後の学長のポットという人が着任します。

2 番目には発展期で、1891 年に大学に改称して、1906 年にアメリカで大学として認可を受けます。ですから、中国では大学と認識されているわけではないのですが、アメリカにおいて大学と同等の扱いを受けるといふ、そういうことになるのです。1918 年ごろには 4 つの学部が設置をされて、1920 年以降にビジネススクールが開講をします。

3 番目が低迷期です。1925 年に五・三〇運動が起き、そして学生のストライキが起き、大学が分裂し、学生が大幅に減少します。1937 年には日中戦争が全面化し、1941 年には太平洋戦争の開戦によって日本が上海租界を占領してしまいますので、実質的な大学としての活動はなくなるということですね。

4 番目が中国化期で、1947 年に中国において大学として認可を受ける。これは国民政府の話です。1949 年に今度は中国共産党が上海を「解放」しますので、アメリカ聖公会との関係を離脱するということになる。1952 年には共産党政権によって大学自体が接収され、複数の大学に再編されて、閉校ということになる。

この接収された大学ですけれども、現在は華東政法大学というものになっておりまして、当時の建築が今もそのまま使われております。これは旧講義棟と思われる校舎ですが、今も講義棟として使っている。また旧事務棟、これは 19 世紀の末に建てられたらしいのですけれども、これもそのまま使われております。この講堂というのは、共産党がこれを接収したときに、いろいろ宣伝に使ったりもしたそうですが、今も講堂として使われています。

この大学はどういう特徴を持っていたのかということ、簡単にいえば 4 つありまして、1 つは中国における初めての本格的な教会大学ということですね。その後いろいろできるのですけれども、まず初めにできたものです。

そして経済、外交関係に著名人を輩出している。宋子文、国民政府の財政部長だった宋子文ですね。顧維鈞は外交部長ですね。陳光甫という人は有名な銀行家。林語堂は文学者ですけれども、ほかにもたくさんいろいろな有名人がいる。

また、実際的な教育を行ったことで知られている。実際どうだったかというのはまた後ほどお話ししますが、英語とか政治学とか経済学などです。さらに、強力な中国人同窓会組織があった。これら 4 つが特徴として挙げられます。

では、この SJUS が開学したころから 10 年代までの教育というものはどういう感じだったのか。

まずは文科と理科に大別されたカリキュラム編成があつて、それは神学、国学、医学がその中心であつたということです。その中で経済学や商学関係の科目はどういうものがあつたのかというのを、1918 年度の便覧のようなものから見てみますと、経済学とか富国学、

銀行理財学と名付けられたものですが、そんなに多くありません。文科科目の中に設定されていたのですけれども、独立した学科が設けられていたわけではありませんでした。

この時期は、むしろ徹底した英語教育をするということに重点が置かれていたわけですが。この英語教育についてですけれども、上海では英語を教育するための非常に多種多様な機関、語学塾とか夜学とか、そういったたぐいのものですが、これが非常に多く設置されていたわけですが。その背景には、上海において英語を話す中国人の需要があったということがあると思うのですが、初期の SJUS もこういった需要を狙っていたのかもしれない。

これは中国人からすれば、アメリカとの関係を持つための玄関口として、この大学が意義付けられているということなのではないか。欧米といいますか、アメリカあるいはこの大学の経営者の立場からすれば、カウンターパート、いわゆる買弁的な人たちですね、こういった人たちの養成を念頭に置いている。それが初期の教育内容だったのではないかと考えております。

次に、高等商業教育が展開していく、ビジネススクールが誕生していく、そういうのは 1920 年代に入ってからになります。1910 年代の後半に、先ほど申し上げましたが、4 つの学部、文理学院と神学院と医学院と土木工程学院が設けられていたわけですが、1920 年にその文理学院の中に、経済与商業管理学系 (The Course of Economics and Business Administration) という学科が設置をされるわけです。

ここで商業教育に特化した教育がなされていくわけなのですが、教員として配置されるのが、チャールズ・フレデリック・リーマーという人です。この人は知っている人は知っているという人だろうと思いますが、アメリカのミネソタ州に生まれて、SJUS に聖公会のミッションとして派遣をされ、教授になります。後にアメリカに帰ってミシガン大学の教授になるのですが、この人は中国経済に関する研究で有名な人で、多くの著作を残しています。戦後は、中国・日本など、東アジア経済問題について研究した人であります。

そのほかにも、サリバンというミシガン大出身の人と、SJUS を卒業してシカゴ大に留学した趙紹鼎という人、この 3 人が専任教員として配置をされていたということです。

このリーマーが基本的にはアイデアを出して、この学科をつくったわけですが、どういうふうを考えていたのかという、設立の趣旨についてですが、まずリーマーは、ビジネスの法則と方法を教育するのだというわけですね。ビジネスに身を投じる学生は、ビジネスのプリンシプルズとメソッズを教育しなければならないのだと。つまり高い規範意識と標準を持つ人材を養成することの必要性を言っておりまして、学問としてのビジネス教育をここでは行うのだというわけです。

さらにリーマーは、中国の伝統的な経済システムの改革というものを視野に入れている。中国のビジネスマンは、その誠実さとしたたかさ、交渉能力で有名だが、概して視野が狭い。そのため、信用による古いビジネスシステムから、会社による近代的システムへと移行することが難しいのだというわけです。大学でトレーニングを受ければ、それは柔軟に対応することが可能になり、だからこの学科が必要なのであるという、そういう理屈にな

っていくわけです。

リーマーは、こういったことを前提にして、設置すべきコースには4つがあるといっております。マーケティングとビジネス組織、会計学、商業史・対外貿易、そして金融・銀行論。金融・銀行論を扱う際には、上海の銀行家との連携、あるいは実習を行わなければいけないというふうに主張するわけですが、その中で特に必要だというのは、外国と中国の会計を同時に理解する人材であると。ですからこのリーマーの考えるビジネススクールの中では、会計問題ということが1つ大きな課題になっていたということです。

リーマーの目指すビジネススクールというのはどういうものだったのかということ、1つには学問としてのビジネススクールというものを追求したい。それはつまり、実務そのものに重点が置かれていないということで、中国人のマネジャー養成を念頭に置いているということです。そういう教育をやりたいかたのではないかと思われるわけです。

これに対して、学長ポットは、中国においてビジネス教育を行うということは、有効な手段であると言っています。どういう意味で有効な手段かというのはいろいろ考えられるところですが、いい方法であると言うわけです。その際の課題は教員の確保である。また、そのビジネス教育というものは、アメリカ本土からの援助を獲得するためにもいい方法である。そういうふうに学長ポットは認識をしていたようでありまして、ですから大いに進めろということになるわけです。

運営状況についてですが、文理学院の在籍者数は、だいたい一定の数で推移をしているのですが、その中で、経済学士の学位を取る候補者になっているのが半分ぐらいということですので、それなりにたくさんいるということなのだろうと思います。また、ほかの大学からの転籍者が多いということが指摘をされているわけです。

実はこの1920年代に商業教育をやっていたのはSJUSだけではありません。1920年代の段階ははっきりと分かりませんが、1930年代の一覧を見ますと、少なからぬ高等教育機関が商業教育部門を持っています。

SJUS とのかかわりでいいますと、滬江大学がまず競合相手だったようなんですが、これもアメリカ系教会学校でありまして、商業教育を一生懸命行っていた大学です。また、1925年に創立の光華大学という、これはSJUS から分離独立した大学です。ほかに今の復旦大学の前身であります復旦公学とか、大夏大学、このあたりがかなり商業教育に力を入れていたようでありまして、ですから学生の取り合いみたいなことになっていたようです。

財政状況については、支出が大幅に増加の傾向があったらしいということです。

次に、じゃあ、SJUS でカリキュラムの内容はどのようなものがあつたのかということですが、履修については教養と専門に分かれていて、その専門のところがいわゆるビジネススクールに当たるわけです。科目は以前に比べて増えています。経済学の理論的な講義については、中国と欧米の比較に重点が置かれていて、実践的な講義はその補助的な位置付けにあつた。1920年度のところをご覧いただければ、いろいろ科目は設けられているのですが、ほとんど担当教員がリーマー1人でやっているという状態でありまして、果たしてどれ

だけ実体があったのかはよく分かりません。1921年度以降は、先ほど申し上げました2人の教員が正式に着任したようですので、多少ましにはなったのかもしれません。ともかく、独立した学科らしい体裁は整えてあるということです。

教育内容については、現実から遊離といますか、実務的なものからは遊離した教育内容になっている。これがSJUSにおけるビジネススクールの特徴であると言っているかと思えます。

このように、教育内容自体にはややクエスチョンマークは残るわけですが、同窓会組織というのは、これははっきりと存在します。同窓会というのは教員の給料、あるいは設備といった面での支援、就職への人脈あるいはその働き掛けというものが見られるわけです。同窓会の組織、そしてその活動はわりと広範なものでありまして、中央・上海だけではなくて、各主要都市に支部が分布をしていて、政府機関や大銀行、新興企業などに多くの卒業生を輩出しているということが分かります。また、これとは別に同郷会というものも組織をされていて、在学生によって同じ出身地同士の組織が設けられ、出身者間の人脈が形成されています。

まとめとしまして、1920年代以降の中国では、教会学校に設立されたビジネススクールを中心に、高等教育機関における商業教育が行われ、それがほかの大学に波及していきます。今回見たSJUSの教育では、これはマネジャー養成を目指すものであって、実業教育とは一線を画していました。これはいわゆる買弁養成というものから、経営者養成へというふうに目的が転換していった結果であるといえるかと思えます。

その背景には経済発展、あるいは反欧米ナショナリズムというものがあって、学問としてのビジネス教育を追求する世界的な潮流というものもあったのだということでございます。

今後の課題としては、先ほど少し触れましたけれども、ほかのアメリカ系大学との比較ということは、今ちょっと考えておりまして、他の教会のアーカイブについてもちょっと調べる必要があるかと思っております。また、教会学校ではない国立あるいは私立の中国系の大学についても検討していく必要があるかと思えます。以上です。